

【 日本の亜使徒ニコライの讃詞 第4調 】

し と と ひ と し く ど う ざ な る も の ち ゆ う
使 徒 等 同 座 者 忠

じ つ に し て し ん ち な る ハ リ ス ト ス の え き し ゃ 、 せ い
實 神 智 役 者 聖

な る し ん に え ら ば れ た る ふ え 、 ハ リ ス ト ス の あ い
神 撰 笛 愛

に み ち た る う つ わ 、 わ が く に の こ う
満 器 我 國 光

し ょ お し ゃ 、 あ し と し ゆ き ょ う せ い ニ コ ラ イ
照 者 亜 使 徒 主 教 聖

よ 、 な ん ち の ぼ く ぐ ん の た あ め 、 お よ び
爾 羊 群 爲 及

ぜん せ か い の た め に 、 い の ち を た も う せ い
全 世 界 爲 生 命 賜 聖

さん しゃ に い の り た ま え 。
三 者 祈 給

【 日本の亜使徒ニコライのコンダック 第4調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き い す 、
光 榮 父 子 聖 神 歸

い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
今 何 時 世 世

せ い せ い し ゃ あ し と せ い ニ コ ラ イ よ 、 わ が
成 聖 者 亜 使 徒 聖 我

くになんぢをたびびとおよびいほうじんとうけ
 國爾旅人及異邦人受

しに、なんぢははじめわがくににおいておの
 爾初我國於己

れをがいらいしゃとしりたれども、ハリストスの
 外來者知

ひかりとあたたかきをながし、なんぢのて
 光暖流爾敵

きをぞくしんのことなあし、かれらにか
 屬神子爲彼等神

みのおんちようをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて
 恩寵與教會建

たり、いまこのきょうかいのためにいのり
 今此教會爲祈

たまあえ、けだしわれらそのしよしはなん
 給蓋我等其諸子爾

ぢによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ
 呼我善牧者慶

べよ。

司祭) (黙誦： ^{せい} 聖なる神、^{かみ} 聖者の中に ^{うち} 息い、^{せいさん} セラフィムより ^{こえ} 聖三の ^{かしょう} 聲を以て歌頌せられ、

ヘルヴィムより ^{さんえい} 讚榮せられ、^{ことごと} 悉くの ^{てんぐん} 天軍より ^{ふくはい} 伏拝せられ、^{ばんぶつ} 萬物を ^む 無より ^{ゆう} 有と

なし、^{ひと} 人を ^{なんぢ} 爾の ^{ぞう} 像と ^{しょう} 肖とに ^よ 依りて ^{つく} 造り、^{なんぢ} 爾が ^{もろもろ} 諸の ^{たまもの} 賜を以て ^{もつ} 之を ^{これ} 飾り、^{かざ}

ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい
願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行 う者を棄てずして、其 救 の爲に痛悔

た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい
を立て、我等卑しくして不當なる 爾 の諸 僕を、此の時に於ても、 爾 が聖な

さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの
る祭壇の光榮の前に立ちて、爾 に當然の伏 拝 讚 榮を 奉 るに堪うる者と

しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ
なしし主宰よ、爾 親ら我等罪人の口よりも聖 三の歌を受け、爾 の仁慈を

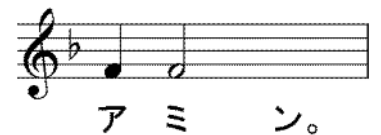
もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ
以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が 靈 と體 と

せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい
を聖にし、我等に生 涯 善 功を以て 爾 に務むるを得せしめ 給え、聖なる

しょうしんぢよ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ
生 神 女と古世より 爾 の 喜 を爲しし諸 聖 人との祈禱に依りてなり、)

司祭) けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ
蓋 我が神よ、 爾 は聖なり、我等光榮を 爾 父と子と聖 神に献ず、今も何時も世世

に、



【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
聖 神 聖 勇 毅 聖

じょうせいのもものよ、われらをあわれめ
常 生 者 我 等 憐

よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
聖 神 聖 勇 毅 聖

なるじょうせいのもものよ、われらをあわれ
常 生 者 我 等 憐

めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
聖 神 聖 勇 毅

せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ
 聖常生者我等を憐
 れめよ。こうえいはちちとことせいしん
 光榮は父と子と聖神
 にきす、いまもいつもよよに、アミン。
 歸今何時世世
 せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ
 聖常生者我等を憐
 れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう
 聖神聖勇
 き、せいなるじょうせいのもものよ、われらを
 殺聖常生者我等を
 あわれめよ。

司祭) (黙誦：主しゅの名なに依よりて來きたる者ものは崇あがめ讃ほめらる、ヘルヴィムに座ざする者ものよ、爾なんぢは其その國くに
 の光こう榮えいの寶ほう座ざに在ありて恒つねに崇あがめ讃ほめらる、今いまも何いつ時よも世よ世よに、)

【 提綱 (プロキメン) 成聖者の 第1調 】

司祭) 慎つつしみて聽きくべし、衆しゅうじん人に平へい安あん、

誦經) 爾なんぢの神しんにも、

司祭) 睿えいち智ち、

誦經) プロキメン、我わが口くちは睿えいち智ちを出いだし、我わが心こころの思おもいは智ち識しきを出いさん、

わがくちはえいちをいだし、わがこころ
 我口睿智出、我心

ろのおも いはちしきをいださん。
思 智 識 出

誦經) 萬民之を聴け、全地に居る者皆之に耳を傾けよ、

わがくちはえいちをいだし、わがここ
我 口 睿 智 出 我 心

ろのおも いはちしきをいださん。
思 智 識 出

誦經) 我が口は睿智を出し、

わがこころのおも いはちしきをいだ
我 心 思 智 識 出

さん。

【 アポστόロス 使徒經 318 端 エウレイ書 13 章 17 節～21 節 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒パウエルがエウレイ人に達する書の讀、

司祭) 謹みて聴くべし、

誦經) 兄弟よ、凡の司祭長は禮物と祭祀とを獻ずるが爲に立てらる、故に彼も亦獻ず

べき物なかるべからざりき。彼若し地に在りしならば、司祭と爲らざりしならん、蓋此には

りつぼうしたが ささげもの けん しさいら てんじょう もの かたち かげ ほうじ もの

イセイに其幕をつくらんとせし時に、告げられしが如し、曰く、慎みて山に於て爾を示

されし式に遵いて、一切を造れと。然れども彼が今更に優れる奉事を得たるは、更に

よきやくもとづ さら よやく ちゅうほしや な かな

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。おおよそ、大祭司が立てられるのは、供え物やいけにえをささげるためにほかならない。したがって、この大祭司もまた、何かささぐべき物を持っておられねばならない。そこで、もし彼が地上におられたなら、律法にしたがって供え物をささげる祭司たちが、現にいるのだから、彼は祭司ではあり得なかったであろう。彼らは、天にある聖所のひな型と影とに仕えている者にすぎない。それについては、モーセが幕屋を建てようとしたとき、御告げを受け、「山で示された型どおりに、注意してそのいっさいを作りなさい」と言われたのである。ところがキリストは、はるかにすぐれた務を得られたのである。それは、さらにまさった約束に基づいて立てられた、さらにまさった契約の仲保者となられたことによる。

【 アリルイヤ 成聖者の第2調 】

司祭) ^{なんぢ} 爾 ^{へいあん} に平安、

誦經) ^{なんぢ} 爾 ^{しん} の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) アリルイヤ、

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、

ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{ぎじん} 義人の口は ^{くち} 睿智を ^{えいち} 言い、 ^い 其 ^{そのした} 舌は ^ぎ 義を ^{かた} 語る、

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、

ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{そのかみ} 其神の法は ^{ほう} 其 ^{そのところ} 心に ^あ 在り、 ^{そのあし} 其足は ^{うご} 揺かざらん、

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、



司祭) (黙誦: 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の 淨き光を輝かし、我が思念

の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる 誠を

畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

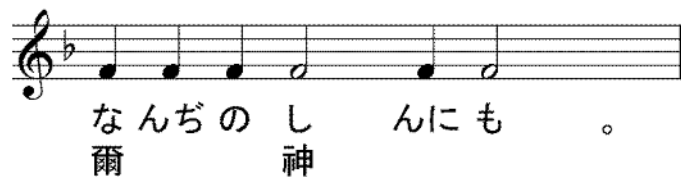
を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン 福音經 イオアン福音書36端 10章9~16節 】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) イオアン傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、主は彼に來れるイウデヤ人に謂えり、我は門なり、我に由りて入る者

は救を得、且入り且出でて、草場を得ん。盜の來るは、唯盜み、殺し、滅さん爲

のみ。我の來りしは、其生命を有ち、且豊に之を有たん爲なり。我は善き牧者なり、

善き牧者は己の生命を羊の爲に捐つ。牧者ならざる傭者、羊の己に屬せざる者

は、狼の來るを見て、羊を棄てて逃ぐ、狼は羊を奪い、又之を散す。傭者は

逃ぐ、其傭者たるを以てなり、羊を顧みず。我は善き牧者にして、我に屬する者を

し われ ぞく もの またわれ し ちち われ し ごと われ またちち し かつわ いのち
識り、我に屬する者も亦我を識る。父の我を識るが如く、我も亦父を識る、且我が生命

ひつじ ため す われ またた ひつじ こ おり ぞく もの われ かれら ひ
を羊の爲に捐つ。我に又他の羊、此の牢に屬せざる者あり、我は彼等をも引くべし、

かれら わ こえ き しこう ひとつ むれひとつ ぼくしゃ な
彼等は我が聲を聽かん、而して一の群一の牧者と爲らん。

(比較用 口語訳) わたしは門である。わたしをとおつてはいる者は救われ、また出入りし、牧草にありつくであろう。盗人が来るのは、盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするためにほかならない。わたしがきたのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである。わたしはよい羊飼である。よい羊飼は、羊のために命を捨てる。羊飼ではなく、羊が自分のものでもない雇人は、おおかみがあるのを見ると、羊をすてて逃げ去る。そして、おおかみは羊を奪い、また追い散らす。彼は雇人であつて、羊のことを心にかけていないからである。わたしはよい羊飼であつて、わたしの羊を知り、わたしの羊はまた、わたしを知っている。それはちょうど、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。そして、わたしは羊のために命を捨てるのである。わたしにはまた、この囲いにいない他の羊がある。わたしは彼らをも導かねばならない。彼らも、わたしの声に聞き従うであろう。そして、ついに一つの群れ、ひとりの羊飼となるであろう。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 光 榮
はなんぢにきす。
爾 歸

※聖体礼儀③ (金ロイオアン聖体礼儀) へ